

第三十一回村研大会

開催地の横顔（2）

—経済更生運動の指定村となつた

茨城県久慈郡大子町 —

第一幕 農家の孝子を救ふ技師発奮の場

村内の小作農家山田耕作の娘勝子、弟の正夫孝心に燃いて家事に手伝いをなす、家二耕作の妻長らくノ病床にあり、父耕作は看護ノかたはら藁細工をして家計を営む。豊田技手登場孝行ノ事情を聞き一家を助け同時ニ村の疲弊状況を知り更生ノ努力せむことを誓い奮心村産業の改発ニ努む。

昭和八年に製作された後編 農村改良劇 栄ゆく村 全五幕七場の第一幕です。

原作は大子町農会駐在技師の藤田里盛、監督は同じく大子町農会の成田健。もつとも、原作の前に山田部落塩ノ平の農事組合員菊池冬之の発想がありました。そして出演一五人は経営熱心な農事組合員の面々です。つまり農事組合員の発想を町の農会が組織・指導し、さらに大勢の農事組合員がこれに応えて作られたというわけです。『ここに大子町』ここで「大子町」というのは明治二二年の町村制施行に伴つて、それまでの大子村、浅川村、上岡村、山田村の四村が合併して生れた大子村（明治二十四年八月に大子町）のことを言います。現在の大子町はその旧来の大子町に九

村（佐原・依上・袋田・宮川・黒沢・生瀬・上小川・下小川の一部、諸富野の一部）が合併（昭和三〇年）して出来たものです。

ともかく大子町はこの「栄ゆく町」をひとつの方として経済更生運動の指定村になっていきます。その意味でこの農村改良劇をついた農事組合の役割には注目しなければならないようです。しかも、大子町の農事組合は経済更生運動がまだ始まっていない昭和三年から四年のころに農村改良劇「栄ゆく村」七幕十場を完成させているのですからなおさらです。残念なことには、いまのところこの内容を手に入れておりません。もし入手できれば、もとの「栄ゆく村」と後編を対比し、変化を調べてみたらおもしろいと思っています。生産の現場からの発想とオロギーとしての経済更生運動との結び目の一事例となるかも知れませんので。

その農事組合ですが、昭和九年には大子町内で二八を数えます。大部分は昭和二年の設立で組合員は一組合当たり一二、三人。この農事組合の源流は明治末期の地方改良事業のなかにあります。茨城県では明治四四年に産業に関する県是を定め、地方産業の改良に意を注ぎますが、その実行機関として農家組合の設立が奨励されています。大正一五年一月には県内の組合数九一一三、組合員数一一万四千余人と調査されております。しかし大正後半期の活動は活潑とはいえないかたようで、昭和になつて新しい時代的要請のなかで再度活性化される、それが農事組合ということになって参ります。こんなふうに見てきますと農村改良劇「栄ゆく村」は明治末・大正初期と昭和を結ぶ、あるいは地方改良事業の下での農民と経済更生事業下の農民とを結ぶ、さらにはまた「大正デモク

ラシー」期の農民とファシズム下の農民とのその連なりを考える、恰好の素材になるかもしれません。

話しが戦後に飛びます。「栄ゆく農村」と関係の深い大子町山田部落（町村制以前山田村）を訪れてみました。昭和四三年のことです。古老の大久保忠次さんに話をしてきました。この方も昭和初年の農事組合で活躍し農村改良劇にも主役で登場する人物です。約百戸の山田部落には区議会があります。部落は七つの小字にわかれていますが、二年に一回、各戸一人の選挙人によって議員が選出され区議会がもたれるという仕組みです。一戸一人という家を単位とした選挙人制度、これには問題あり、とは思いますが投票によって選ばれた人々によって区が運営されても、これは見識でしょう。大久保さんも停滞を嘆いていましたように、改善すべきことはあるとしても、です。そしてこの制度をつくった中心人物が「栄ゆく農村」時代の農事組合員であったということは、さきの明治末以降の「連なり」に、もうひとつ検討すべき戦後の事実がわかったということにはならないのでしょうか。（東敏雄会員）